

聖書：コリント人への手紙第一 15：20～28

説教題：初穂であるキリスト、次に

日時：2023年2月5日（朝拝）

I コリント 15 章は死者の復活について述べている有名な章です。なぜパウロがここでこのテーマを取り上げたのかについては前回の 12 節に示されていました。「ところで、キリストは死者の中からよみがえられたと宣べ伝えられているのに、どうして、あなたがたの中に、死者の復活はないと言う人たちがいるのですか。」コリント人たちはパウロを通してキリストの復活を含む福音について聞きました。キリストの復活は福音の中心メッセージの一つであり、復活したキリストはペテロをはじめとする 12 弟子ばかりでなく、同時に 500 人以上の兄弟たちに現れたことが 6 節に述べられていました。このコリント人への手紙はイエス様の復活後、約 20 年後に書かれており、イエス様を同時に見た 500 人以上の兄弟たちの大多数はなおその時、生きていました。ですからそのこと自体は疑うべきことではありませんでした。問題はその福音を聞きながら死者の復活はないと主張する人たちがコリント教会の中にいたことです。おそらく彼らは当時のギリシャの霊肉二元論の思想の中で生きていた人たちとして肉体の復活という話は受け入れられないと考えていたのだと思われます。当時の考えでは人間は霊と肉の二つに部分に分けられ、霊は清い部分である一方、からだはより劣る汚れた部分ととらえられていました。そして死の時、魂は肉体から解き放たれて救いに至り、一方のからだは汚れた部分として朽ち果て、滅びる。そんな風に考えていた彼らにとって、この地上の肉体が復活して天の生活に入って行くという考えは受け入れがたいことだったのでしょう。

そんな彼らにパウロは前回の 12～19 節で、もし死者の復活がないならキリストの復活もない！と述べました。ここの「死者の復活」で考えられているのは信者の復活です。信者の復活とキリストの復活は一つに結び付いている。片方があって片方がないということはない。片方がないなら、もう片方もなくなるという関係にあるとパウロは述べました。そしてもしキリストの復活がないなら、それはどんなに恐ろしいことを意味するかについて消極的の面から語られたのが前回の箇所でした。今日の 20 節以降では反対に積極的の面からパウロは語ります。

20 節で彼は言います。「しかし、今やキリストは、眠った者の初穂として死者の中

からよみがえられました。」 事実はそうです。キリストの復活はすでにコリント人たちが聞いて受け入れたメッセージです。そのこと自体はここで問題になっていません。パウロが言わんとすることは、そのキリストの復活は何を意味しているかということです。まず彼が言っていることは、キリストの復活は眠った者の初穂としての復活であるということです。「眠った者」とは信仰を持って地上の生涯を終えた聖徒たちのことです。彼らは死んで滅んだわけではなく、復活の日まで一時的に眠っているに過ぎないと表現されています。かの日が来れば、その人々は起き上がる。その初穂としてキリストはよみがえったと言われています。「初穂」とは収穫において最初に取りれるもののことです。それは後に本格的に収穫されるものと同質であり、それらの先駆けです。また後に来るものを保証するものとも言えます。ですからイエス様の復活は単独の出来事ではないのです。それは今は眠っている多くの聖徒たちのやがてのよみがえりの前触れです。後に起こる本格的な復活を保証するものです。なぜイエス様の復活と後に起こる聖徒たちの復活にはそのような関係があるのでしょうか。そこでパウロは21～22節でアダムとキリストの話をします。

21節に「死が一人の人を通して来た」とあるのは、22節から分かるようにアダムのことです。アダムはエデンの園で「善悪の知識の木からは食べてはならない。その木から食べるとき、あなたは必ず死ぬ」と言われていたのに、その木から取って食べました。アダムはあの時、単なる一人の個人あるいは私人として行動していたのではなく、全人類の始祖として、その代表として、そのかしらとして、いわば公人として行動していたというのが聖書の主張です。その全人類のかしらであるアダムが罪を犯したことによって、彼が代表する全人類が罪ある者となり、死が入って来たと言書は語ります。22節の「アダムにあってすべての人が死んでいる」という部分の「アダムにあって」とは、「アダムとの結合の内に」という意味です。すべての人は人類の最初の祖先アダムと結ばれています。その最初の一人の行為によって、彼とつながれているすべての者に罪と死が入ったというのが聖書の説明です。

しかしそのように人類の上に特殊な立場を持つのはアダム一人ではないと言書は語ります。もう一人別のかしらが存在します。それがキリストです。そのかしらはアダムと同様、その方につながる人たちに決定的な影響を及ぼす代表者です。パウロは言います。「死が一人の人を通して入って来たように、死者の復活も一人の人を通して来る！」と。なぜもう一人のかしらはこのような祝福をもたらすことができるのでし

ようか。それはキリストはアダムが失敗した神に完全に従う歩みを人として成し遂げるからです。またアダムの罪によって全人類に臨むこととなった呪いをすべてご自身に引き受け、その代償を払い、清算するというわざを成し遂げるからです。神はこの方を人類全体と関わるもう一人の代表者として立て、この方との結合において、人がいのちに生きる道を開かれました。ですからキリストは後にこの章の 47 節で第二の人、第二のアダムと表現されます。またその少し前の 45 節では「最後のアダム」とも呼ばれます。この二人の他に第 3 のアダムは存在しません。つまり聖書は人類の歴史をこの二人の代表によって理解すべきことを示しています。アダムは古い人類のかしらであり、彼によって罪と死が全人類に入って来ました。すべての人はこの第一のアダムとつながっています。そんな私たちに神は第二のアダム、キリストを新しいかしらとして与えてくださいました。こちらは全人類が自動的につながるのではなく、この方により頼む者たちが結びつけられます。ですから 22 節後半の「キリストにあって、すべての人が生かされる」とあるところの「すべての人」は「キリストを信じるすべての人」という意味です。そのすべての人は生かされます。この「生かされる」は未来時制で書かれていますから将来の復活を指していると考えられます。このようにキリストの復活は単なるキリスト個人の出来事ではなく、キリストと結ばれてやがて復活するすべての人々の「初穂」としての意味を持っています。キリストをかしらとし、キリストにより頼む多くの人々の復活が後に続くのです。

ではどうして信者の復活はすぐに続かないのでしょうか。その問いにパウロは 23 節以降で答えます。まず 23 節：「しかし、それぞれに順序があります。まず初穂であるキリスト、次にその来臨のときにキリストに属している人たちです。」 来臨の時とは歴史の最後におけるキリストの再臨の時のことです。信者たちの復活はその時に起こることと神は定めています。そういう順序があります。ですからその日まで待つ必要があります。そしてその信者たちの復活は、その後に引き続く「終わり」と関連することが 24 節以降に述べられます。パウロが言わんとしていることは、やがての信者の復活はただそれだけのことではない。信者の復活は、この世界に対する神の目的が完成へと至る「終わり」の出来事とセットになっているということです。24 節以降に、その「終わり」と関連する 4 つのことが述べられています。

まず一つ目は 24 節です。その終わりの時、「キリストはあらゆる支配と、あらゆる権威、権力を滅ぼし、王国を父である神に渡されます。」 ここに出て来る支配、権威、

権力は滅ぼされると言われていますから、これらは神に逆らう諸々の悪の力を指すものでしょう。今なお悪の力はこの世界に働いています。しかし終わりの時にそれらは滅ぼされます。これは無力化されるとか無効にされるという意味です。やがての信者たちの復活はあらゆる悪の力が無力化され、滅ぼされる出来事とセットになっています。そしてそれまで神から全権を委ねられていたキリストは、その統治を完全なものへと仕上げて、その王国を父なる神に渡します。

二つ目は 25 節です。今見たすべての敵をその足の下に置く時までキリストは王として治めると言われています。この「治める」は現在時制で表現されています。キリストは復活して天に上げられ、父なる神の右の座に着き、今、この世界と宇宙の上に全権を持っています。そういう意味で、この世界は今やキリストの王国となっていると聖書は言います。そしてキリストは終わりの時にすべての敵を最終的に征服した後、この王国を神に渡します。その日までキリストは今日も王であります。

三つ目は 26 節です。すべての敵を足の下に置くことが 25 節で言われましたが、そのすべての敵の中には最後の敵である死も含まれるということです。最初の人アダム以降すべての人を支配して来た死。誰も逆らえず全員を屈服させてきた最後の敵、死。しかしこの死も、キリストの復活によって絶対的な力を持つものではなくなりました。実はそこで決定的な勝負がつかしました。にもかかわらず死は終わりの時まで存在します。しかしすべての敵を足の下に従わせる最終段階で、ついに死は完全に無力化されるのです。やがての私たちの復活は、この死が無力化され、滅ぼされる時に起こります。すべての信者の復活をもって最後の敵である死は最終的に滅ぼされるのです。

そして四つ目は 27～28 節です。神は万物をキリストの足の下に従わせることが言われましたが、もちろんその万物の中に父なる神が含まれるわけではないと述べられています。聖書をある程度学んだ人にとって、それは言わずもがなのことのようにも思えますが、これは混乱を避けるためでしょう。万物がついに完全に御子に従う時、御子も父なる神に従います。これは 24 節で言われた「王国を父である神に渡される」と同じことです。もともと神がこの世界の救いと管理を御子に委ねられました。聖なる神は罪に堕ちたこの世界を直接祝福することはできません。ですからこの世界をあるべき状態へと救い出し、回復させ、完成させる働きを神は仲保者キリストに委ねました。キリストはその委託された働きを最後まで成し遂げて後、父なる神に返される

のです。これは「神が、すべてにおいてすべてとなられるためです」とあります。これこそ本来あるべき世界のあり方です。神がすべての中心にある世界です。すべてのものが神の栄光を現し、神との交わりにおいて最も豊かな満たしを受ける世界です。すべてが神を中心として調和します。世界の歴史は最後にこの最も祝福された本来的な状態へと至ります。私たちの復活はこの幸いとつながっています。キリストの復活はこの最後の状態を必ずもたらすものとして、先んじてこの世で起こった出来事なのです。

杉並教会設立 64 周年を記念するこの日、今日の箇所から教会について二つのことを心に留めたいと思います。一つは私たちは今日の箇所から教会のかしらなるキリストについて改めて素晴らしい真理を覚えさせられます。一人の人アダムを通して罪と死が全人類に入って来ましたが、神が立てたもう一人の人を通して罪の赦しと永遠のいのちが入って来るようになりました。その一人の方と私たちはつながる者たちとされています。その一人の方をかしらとする民とされ、私たちは今日もいのちの中を歩む者たちとされています。この方はすでに復活し、最後の敵である死を原理的に打ち破り、今日も王としてこの世界を治めています。神の深い御心により、最後の日までなお悪の活動は許されており、そのため私たちの毎日の生活には多くの苦しみや悩みがあり、また死があります。しかしそれら悪の力が主権者となることは決してありません。ついに神が定めた順序を経て、私たちはキリストがそうであるようからだをもって復活することとなります。そしてそれとセットで世界の歴史は大団円を迎えます。すべてがまとめられ、キリストによって仕上げられて、キリストの王国は「神がすべてにおいてすべてとなられる」神の国へと移行します。私たちが今日キリストに結ばれているということは、このような恵みに生かされていることを意味します。この主に結ばれ、今日も養われていることを心から感謝したいと思います。私たちの行く先にはどんなことが待っているのか、キリストの復活によってこの先どんなに素晴らしい将来が確実なものとして備えられているのかを見て、私たちが結ばれている主を心から喜び、主に感謝し、御名を賛美したいと思います。

そしてもう一つは教会はこのような主と結ばれていることを喜び、感謝するとともに、終わりの日に向けての戦いに参与するようにも招かれているということです。エペソ人への手紙 6 章 12 節:「私たちの格闘は血肉に対するものではなく、支配、力、この暗闇の世界の支配者たち、また天上にいるもろもろの悪霊に対するものです。」

今日の箇所、あらゆる支配、権威、権力をキリストが滅ぼし、無力化すると言われていましたが、私たちもその戦いの中に置かれていること、神のすべての武具を取っ  
とも戦うべきことが言われています。また I コリント 15 章最後の 58 節ではま  
とめとしてこう言われます。「ですから、私の愛する兄弟たち。堅く立って、動かされる  
ことなく、いつも主のわざに励みなさい。あなたがたは、自分たちの労苦が主にあつ  
て無駄でないことを知っているのですから。」 主キリストは復活し、今日もまことの  
王としてこの世界を支配し、導いておられます。そして神に逆らうあらゆる勢力をつ  
いには無力化し、神の国へと導いて行かれます。その主と結ばれていることを感謝し  
て、主の御言葉に聞き、主の力に生かされ、神の国が完成に至るために主とともに戦  
う教会の歩みへ進みたいと思います。アダムにおいて罪と死がこの世界に入って来ま  
したが、もう一人の方キリストにおいていのちと神の国の祝福が入って来ました。な  
お様々なことがある中でも、私たちはこの主と結ばれた者とされている喜びを私たち  
の行いと言葉をもって証しし、主とともに御国の完成のために労苦し、豊かに報われ  
る主の教会の光栄な歩みへ導かれてまいりたいと思います。